

## 今週の為替相場見通し(2024年3月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.48 ~ 150.57	147.09	145.00 ~ 148.00
ユーロ	(ドル)		1.0838 ~ 1.0980	1.0941	1.0850 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		160.55 ~ 163.50	160.84	159.50 ~ 162.50
英ポンド	(ドル)		1.2657 ~ 1.2893	1.2859	1.2600 ~ 1.3000
(1英ポンド=)	(円)	*	188.24 ~ 191.19	189.09	187.00 ~ 193.00
豪ドル	(ドル)		0.6477 ~ 0.6667	0.6627	0.6540 ~ 0.6690
(1豪ドル=)	(円)	*	97.28 ~ 98.21	97.46	96.50 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 145.00 ~ 148.00 円

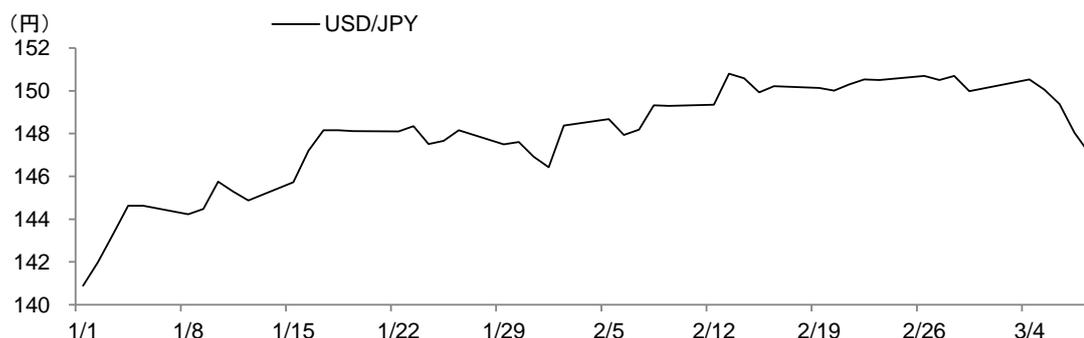
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、米経済指標の下振れや日銀の政策修正観測などを受け、週後半に急落した。週初4日、150.13円でオープンしたドル/円は、政府のデフレ脱却表明に関する観測報道を背景に一時150円台を割り込むも、海外時間は米金利上昇につれじり高に推移し、週高値の150.57円まで上昇した。5日、ドル/円は海外時間に発表された米2月ISM非製造業景気指数の弱い結果を嫌気し、米金利低下と共に149円台後半まで下落。その後150円台回復も上値は重いまま149円台まで軟化し引けた。6日、ドル/円は150円を挟みレンジ推移。海外時間は「日銀3月会合で少なくとも1人がマイナス金利解除を主張」との観測報道を受けた円買い相場の中で、米2月ADP雇用統計の弱い結果を受けた米金利低下も重石となり、149円台前半まで下落した。7日、ドル/円は日銀のマイナス金利早期化期待が進行、円が買われNY時間にかけて147.59円まで急落。8日のドル/円は、148円台を回復も海外時間に入ると、日通信社の報道をきっかけに3月にも日銀によるYCC修正実施の思惑からドル/円は1円程度急落。さらに発表された米2月雇用統計結果を受け、FRBによる早期利下げ観測が広がり、ドル/円は週安値となる146.48円まで下落した。その後は147円台を回復するも上値の重いまま、147.09円で越週した。

今週のドル/円はドル売り円買い圧力が強まりやすい展開になるものと見る。本邦では先月発表のCPIの上振れや、先週の日通信社による早期マイナス金利解除を窺わせる観測報道に加え、中川日銀審議委員、植田日銀総裁により相次いでタカ派的な発言がなされたことで、来週の日銀金融政策決定会合においてマイナス金利解除が実施されるとの思惑が強まっている。対して米国では先週のパウエルFRB議長による議会証言でのハト派的な発言や、予想を下回る米経済指標の結果を受け、利下げの早期(6月)実施がコンセンサスとなっている。日米金利差縮小が意識され始める環境下、これらの材料がドル/円の下落圧力を強めるものとする。今週は12日(火)に米2月消費者物価指数(CPI)、14日(木)に米2月小売売上高、さらに15日(金)には本邦で2024年春季労使交渉(春闘)の1回目の集計結果の発表が予定されており翌週に日銀金融政策決定会合、FOMCを控える中、今後の金融政策の方向性を占う材料となることから注目したい。

## (3)先週までの相場の推移

先週(3/4~3/8)の値動き: 安値 146.48 円 高値 150.57 円 終値 147.09 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1100 159.50 ~ 162.50 円

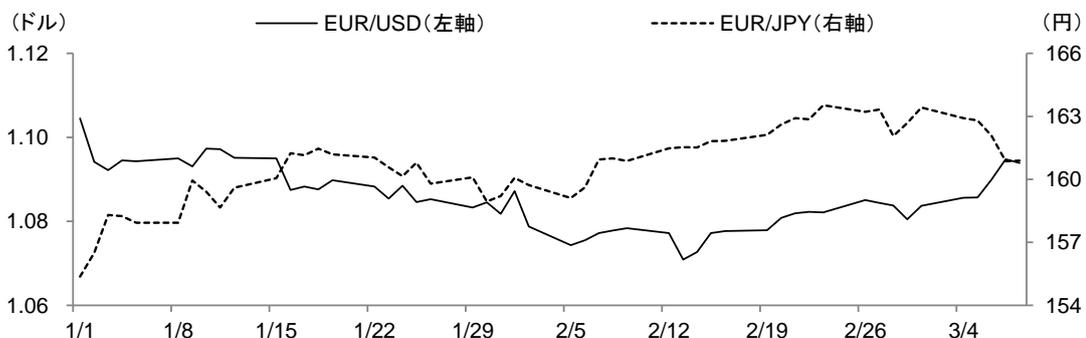
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、米金利低下を受け、週後半に上昇した。週初4日、1.0842でオープンしたユーロ/ドルは、材料に欠ける展開の中で米金利上昇が重しとなるも、ボンド買いの流れが波及し、1.08台後半にじり高推移した。5日、ユーロ/ドルは方向感に欠ける値動きが継続。おおむね米金利動向につれる展開の中で、1.08台半ばでレンジ推移。6日、ユーロ/ドルは米金利低下や欧州株価の堅調推移が支援材料となり、1.09台まで上昇した。7日、ユーロ/ドルはECB政策理事会での政策金利は現状据え置き、インフレ見通しは下方修正の発表を受け、一時1.08台後半まで急落。ただ、その後のラガルドECB総裁の記者会見が市場予想ほどハト派な内容ではなかったことから、独金利上昇につれる格好で約1か月半ぶりの高値となる1.09台半ばに反転上昇した。8日、ユーロ/ドルはビルロワドガロー仏中銀総裁の4月か6月の利下げ開始を示唆する発言などを受けて1.09台前半へ反落。注目された米2月雇用統計では非農業部門雇用者数が予想を上回るも前回分が下方修正されたこと、失業率が悪化したことでドル売り優勢となり、1.0980まで週高値を更新。一巡後は値を戻し、結局1.0941で越週した。

今週のユーロ/ドルはECB当局者の発言に振られながらも、底堅い推移を予想。先週のECB政策理事会では市場予想通り4会合連続の政策金利据え置きが決定された。また、今後3年のインフレ見通しは下方修正されたが、利下げについては議論されていないことが明らかになった。あくまでECBの最重要課題は賃金インフレの動向であり、6月会合までにデータを見極める姿勢である。市場の利下げ織込みは6月から変わっていない。今週はECB政策理事会明けの当局者発言を複数控えており、ラガルドECB総裁と同様にタカ派的な見解が示されればユーロは多少強含むだろうが、既に織り込まれていることもあり市場の反応は限定的か。一方、米国では12日(火)に米2月CPI、14日(木)に米2月小売売上高、米2月PPIなど、利下げ開始時期を探る上で重要な指標が続く。先週末の冴えない雇用統計と同様にFRBによる早期利下げ開始を後押しする内容となれば、欧米金利差の縮小を背景にユーロ/ドル相場は底堅く推移するだろう。

### (3) 先週末までの相場の推移

先週(3/4~3/8)の値動き: (対ドル) 安値 1.0838 高値 1.0980 終値 1.0941  
(対円) 安値 160.55 高値 163.50 終値 160.84



(資料)ブルームバーグ

### 3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2600 ~ 1.3000 187.00 ~ 193.00 円

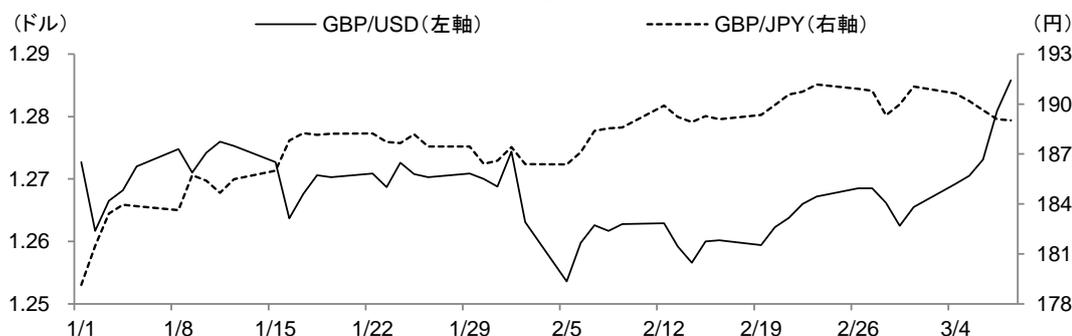
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は対ドルで大きく反発した。米国連邦準備制度理事会(FOMC)のパウエル議長の議会証言や、米2月雇用統計を経て、米国が年央にも利下げを実施するという市場の見方が強まった。ポンドは対ユーロでも上昇しており、主要先進国中銀の中で、イングランド銀行(BOE)が高金利政策をより長く維持するという見方が引き続きサポート要因となっていよう。一方、ポンドは対円では下落した。日本銀行の3月会合でのマイナス金利解除観測の高まりを受けて、円が主要通貨に対し上昇した。イギリス国内の要因では、3月6日の予算発表が注目された。事前報道通り、ハント財務相は国民保険料率の引き下げなど、家計負担を軽減する方針を示している。給与天引きされる被雇用者負担の国民保険料率は8%と、従来の10%から引き下げられる。昨年11月の秋季財政報告でも同保険料率は2%引き下げられている。今回と合わせて被雇用者2700万人(英国の給与所得者は2024年1月時点で3,036万人)の支払い負担は年間で平均900ポンド(約17万円)軽くなると、ハント氏は説明している。その他、歳出面では中小企業への融資支援、クリエイティブ産業への追加減税、次世代送電網システム施設への支援、住宅建設促進、個人投資促進、といった項目が並んでいる。歳入面では、事前報道通り、英国国内に居住しているが、税法上は非居住者扱いとなる「Non Dom」制度の見直しの方針が示された。また、予算責任局(OBR)による実質GDP成長率見通しの引き上げ(2024年は前年比+0.8%と従来の同+0.7%から上方修正された)も減税措置のための余裕を生み出すのに寄与したものと見られる。

今週1週間も英ポンドはBOEの高金利政策の持続観測がサポート要因となる見込みだが、データ次第の側面が大きそうだ。グローバルには3月12日に発表される米2月CPIが最大の焦点となる。1月分は特にコアサービスの部分が前月比、予想以上に加速し、ドル高を促した。2月分は反動で減速する可能性もあるだろうが、2か月連続で上振れとなれば、市場の米Fedに対する利下げ観測への影響は大きくなるだろう。英国の経済指標では、3月12日(火)に公表される労働市場関連統計や、3月13日(水)発表の1月分のGDPが注目される。

#### (3) 先週までの相場の推移

先週(3/4~3/8)の値動き: (対ドル) 安値 1.2657 高値 1.2893 終値 1.2859  
(対円) 安値 188.24 高値 191.19 終値 189.09



(資料)ブルームバーグ

#### 4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6540 ~ 0.6690 96.50 ~ 98.00 円

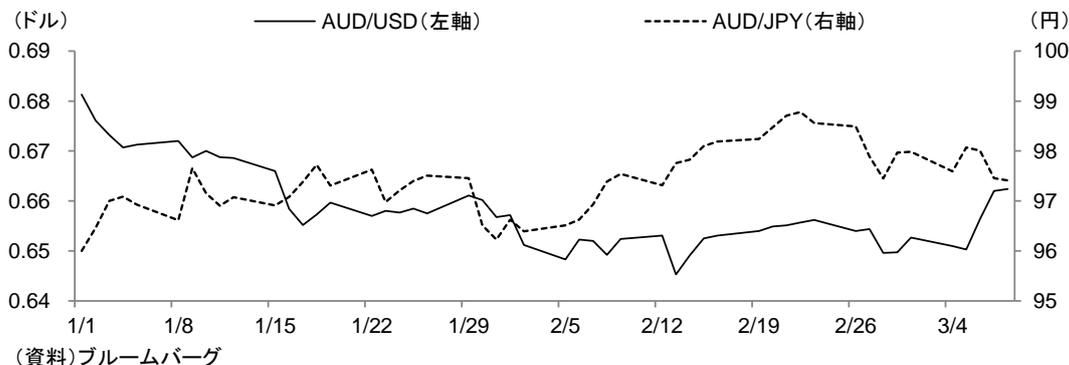
##### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65台割れから0.66台まで大きく上昇。週初4日、この日発表された豪10~12月期企業在庫が予想に反して減少したことを受け、豪10~12月期GDP成長率が前期比でマイナス成長となる可能性が意識され、終日かけてじりじりと下落する展開となり0.6509でNY引け。5日、序盤は株価が下落する中、豪ドルも売りが優勢に。5日から開幕した全人代で発表された財政赤字目標が23年から縮小し、控えめな刺激策に留まる可能性が高まったことも、豪ドル安の流れにつながった。その後、シドニー時間午後にかけて、東京3時に期限を迎える大型のオプション行使価格につられて下落幅を拡大し、一時週安値の0.6477まで下落したが、この近辺にある支持線にはじかれて上昇に転じた。米2月ISM非製造業総合指数が予想を下回ったことや、米1月製造業受注、米1月耐久財受注が軒並み予想比悪化したことを背景に、ドル売りの流れになったことも、NY引けにかけて豪ドルを支えた。6日、豪10~12月期GDPを控えて序盤は小安く推移し一時0.65割れまで下落。豪10~12月期GDPは前期比0.2%と事前予想通りの結果となり、市場の反応は限定的であった。その後ドルに売りが膨らむ中、豪ドルは上昇に転じ0.65台乗せ。パウエルFRB議長による議会証言では、「年内いずれかの時点で利下げを開始するのが適切になる可能性が高い」との発言を繰り返したことを受けて、ドルが売り進み、豪ドルは一時0.6581まで上昇した。その後NY引けにかけて小幅買い戻されて0.6560近辺で引けた。7日、前日からのドル安の流れを引き継ぎ、豪ドルは終日上値を追う展開となった。パウエルFRB議長が上院銀行委員会の公聴会で行った証言で、利下げを始めるのに必要な確信に近づいているとの見方を示唆。この発言を受けて米債利回りが短期ゾーンを中心に低下し、株価は上昇幅を拡大した。ドル売りが強まる中、豪ドルは0.66ちょうどをあっさり上抜け、0.6620近辺まで上昇して引けた。8日、豪ドルは前日の流れを引き継ぎ、買いが先行。米2月雇用統計では非農業部門雇用者数変化が予想を上回ったものの、前日値が大幅下方修正されたことや失業率が2年ぶりの高水準に悪化したこと等が嫌気され、相場は上下に激しく反応した。豪ドルは一瞬週高値の0.6667まで上昇した後、売り戻されて0.6625近辺で引けた。

今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。今週は12日(火)米2月CPI、14日(木)米2月小売売上高、15日(金)中国MTLレートなどが注目される。米2月CPIに関しては、前回1月の結果が大きく上振れたことでインフレ再燃懸念からFEDの利下げ観測後退の流れが進み、豪ドルが下落する展開となった。今回の米2月CPIの発表でインフレが順調に低下してきていることが確認できれば、豪ドルは一段と上値を追う可能性もあると見る。今週は豪州発で注目される指標発表が特段予定されていない為、引き続きFED利下げ観測の調整に振られる展開を予想する。一目均衡表では今年2月以降一貫して雲の下での推移が継続していたが、先週金曜日に雲の下限を上抜け、現在は雲の中にいる。相場の変調となるのか、値動きに注目したい。

##### (3) 先週末までの相場の推移

先週(3/4~3/8)の値動き: (対ドル) 安値 0.6477 高値 0.6667 終値 0.6627  
(対円) 安値 97.28 高値 98.21 終値 97.46



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。